

平成28年度 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価資料（進捗状況報告書）

1. 概要

研究交流課題名 (和文)	新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築		
日本側拠点機関名	東京大学東洋文化研究所		
コーディネーター 所属・職・氏名	東洋文化研究所・教授・羽田正		
相手国側	国名	拠点機関名	コーディネーター所属・職・氏名
	アメリカ合衆国	プリンストン大学	Department of History・Professor・Jeremy ADELMAN
相手国側	国名	拠点機関名	コーディネーター所属・職・氏名
	フランス共和国	社会科学高等研究院	Research Centre for History・Directeur d' Etudes・Alessandro STANZIANI
相手国側	国名	拠点機関名	コーディネーター所属・職・氏名
	ドイツ連邦共和国	ベルリン・フンボルト大学	Institute of Asian and African Studies・Professor・Andreas ECKERT

2. 研究交流目標

申請時に計画した目標と現時点における達成度について記入してください。

○申請時の研究交流目標

1. 新しい世界史理解と叙述の探求と確立：従来、世界各地における世界史の見方は、ヨーロッパ中心史観を下敷きとするという点では共通点を持ちながらも、国や地域によって多様だった。この多様な世界史の見方を拠点間で相互に参照・批判するとともに、現代世界において必要な地球への帰属意識（地球市民意識）を共有できる新しい世界史の理解と叙述の方法を、拠点間の議論を通じて探求し確立する。

2. ミクロな歴史研究との交流：新しい世界史研究の成果を、一国史や地域史などミクロ・レベルの歴史の研究者に投げかけて当該研究領域における既存の知の再検討を促す。また、その再検討結果を新しい世界史の解釈に活用する。この相互往復運動の繰り返しによって、歴史研究全体の活性化を図る。

3. 上記2つの大目標を達成するために、4研究機関が緊密に連携し、新しい世界史研究と教育のためのネットワーク型拠点を構築する。このネットワークによって実現を図る主な事業は次のとおりである。

①研究者の交流：毎年一定数の研究者、PDを他の3拠点機関に派遣し、同時に3拠点機関から研究者を受け入れる。派遣・受け入れ研究者は、派遣先・受け入れ先で講演や授業を行い、国際共同研究に参画する。

②①と連動させる形で、毎年いずれかの拠点機関でテーマを定めた研究集会とセミナーを開催する。

③毎夏、いずれかの拠点機関で公開サマースクールを開講し、4拠点機関の大学院学生を中心に広く世界の若手研究者に世界史学習と研究交流の場を提供する。また、博士論文を準備中の大学院生に対して、4拠点機関の研究者からなる指導チームを編成し、より完成度の高い論文が執筆できるように共同で指導する。

○目標に対する達成度とその理由

上記目標に対する2カ年分の計画について、

十分に達成された

概ね達成された

ある程度達成された

ほとんど達成されなかった

【理由】

5年計画の2年目が終わった段階で、大目標2つのうちの1つ目については、拠点間の相互理解が相当程度進んだと言える。4拠点間での継続的な意見と情報の交換をベースとして、ベルリン拠点の責任者の一人、Sebastian Conrad がグローバルヒストリーの方法に関する画期的な書物を出版した。また、拠点間の交流の成果を踏まえた東京拠点の責任者羽田正による論文や編著も出版され始めている。これらの成果を基盤として、残り3年で拠点間での各種の研究交流をさらに発展させれば、新しい世界史理解と叙述の方法を確立することは十分に可能だと考える。2つ目の目標である歴史研究全体の活性化は、1つ目の目標の達成程度と連動しており、今後、新しい研究の成果が公表されるにつれ、拠点のある各国を中心に加速度的に進むと考えている。日本では、日本語による影響力のある著作をできるだけ多数出版することも重要である。

2つの大目標を達成するための具体的な事業は、順調に進められている。この2年の間に東京大学拠点から他の3拠点に派遣した研究者・大学院学生は、プリンストン7人、パリ13人、ベルリン11人であり、その多くは訪問先で講演や研究報告を行なった。一方、他の3拠点から本拠点を訪れた研究者・大学院学生は、プリンストン15人、パリ14人、ベルリン14人であり、これらの人々は東京大学で講演や研究発表を行い、東京拠点の研究者や学生と活発な意見交換を行った。共同研究の中核をなし、4拠点の研究者が一堂に会して開催される新しい世界史／グローバルヒストリーの方法に関する共同セミナーは、1年目はベルリン、2年目はパ

りで開かれ、白熱した議論が交わされた。3年目の本年度は、東京でこのセミナーが開催される予定である。

準備の都合で2年目から始まったサマースクールは、第1回を東京拠点を担当し、1週間に亘って4拠点から集まった研究者と大学院学生33人が共同で、各大学院学生の博士論文計画について密度の濃い議論を展開した。大学院学生は、狭い専門分野にとらわれない異なる角度や視点からの意見や助言と刺激を受けて、準備中の博士論文の作成に大きな示唆を得た。その後、東京拠点から参加した7人の学生のうちの1人がパリ、2人がプリンストン、1人がベルリンへ短期留学に出かけ、各拠点の研究者からさらなるアドバイスを受けている。

また、サマースクールのために集まった各国の代表的研究者が参加して、東京拠点の主催で「グローバルヒストリーの可能性」と題する一般向けシンポジウム（英語）が開催された（平成27年9月9日 於）東京大学）。そこでは、歴史研究の新しい傾向についての各国ごとの状況と新しい研究の方向性について、聴衆との間でも活発な意見交換がなされた。このときの報告に新しい具体的な研究成果を付けくわえた論集が、近く日本語で出版される予定である。

これらの活動を通じて、拠点代表の羽田と他の拠点の責任者との間での強い信頼関係が醸成されたことは、4拠点を中心とする国際教育研究ネットワークの今後の発展のための大きな収穫である。信頼関係醸成の具体例を3つ挙げる。1) プリンストン大学のAdelman教授と羽田が共同して、平成28年9月から新たにプリンストン大と東大の2大学間でグローバルヒストリーに関する学術交流を開始することになった。4拠点間の交流に加えて、両大学間でさらに多くの数の研究者が訪問し合い、両大学の学生だけを対象とする短期セミナーが開催されることになっている。2) 平成29年春からのグローバルヒストリー博士課程開設計画を持つベルリン拠点は、そのために必要な資金をドイツ研究財団に申請したが、申請書の最大のセールスポイントは、4つの拠点の緊密な連携による国際的な教育研究ネットワークだった。このため、平成28年3月にベルリンで行われた財団のヒアリングには羽田が招かれ、審査員に対して4拠点によるネットワークの重要性と実効性をアピールした。計画は無事に採択され、平成29年からはベルリン拠点との間での研究者・学生のなお一層活発な交流が期待される。3) パリ拠点は平成28年9月から新たな研究資金を得て、グローバルヒストリーに関する大きな共同研究をスタートさせるが、その責任者は拠点代表であるStanziani教授であり、羽田はその研究活動に加わるとともに、国際アドヴァイザリーボードの委員を務めることになっている。

以上、他の拠点の研究者たちの時宜にかなった提案や計画もあって、4つの拠点をつなぐ教育研究のネットワークは、この2年で期待された以上に強化され、緊密な連携が可能になっていると言える。今後はこのネットワークのさらなる発展を期すとともに、新しい世界史/グローバルヒストリーに関する教育研究の日本国内での可視化とまだネットワークに加わっていない他国の有力な研究組織や研究者との協力関係強化を目標として、さらに努力を続けてゆきたい。

3. これまでの研究交流活動の進捗状況

(1) これまで(平成28年3月末まで)の研究交流活動について、「共同研究」、「セミナー」及び「研究者交流」の交流の形態ごとに、派遣及び受入の概要を記入してください。※各年度における派遣及び受入実績については、「中間評価資料(経費関係調書)」に記入してください。

○共同研究

【概要】

毎年、4つの拠点から研究者が1つの拠点に集まり、新しい世界史/グローバルヒストリーの方法に関するテーマについて情報と意見を交換する「共同セミナー」(次項)を中核とし、これに研究者と大学院学生の交流を組み合わせ、共同研究を組み立てている。

研究者交流の項で述べるように、他の3拠点から東京を訪れた研究者による研究報告、東京拠点から他の3拠点を訪れた研究者による研究報告は、かなりの頻度で開催されている。また、平成27年9月に東京で開催されたサマースクールの際には、来日した他の3拠点の研究者たちが参加して、「グローバルヒストリーの可能性」と題する一般向けのシンポジウムを東京大学で開催した。「共同セミナー」とこれらの各種イベントを通じて、本拠点の歴史研究者と海外3拠点の歴史研究者との間の研究交流と相互認識は、この事業の始まる前とは比較にならないほどに進んでおり、その成果として、各拠点の主要な研究者が寄稿する『グローバルヒストリーの可能性』と題する書籍が今年度のうちに刊行される予定である。

また、このネットワークを通じて得られた刺激と知見を活かした具体的な研究成果が、別添の中間評価論文リストの4、9、14をはじめとしてすでに数多く公表されている。これらの中には、英語の global history と日本語のグローバルヒストリーの意味や方法の違いを指摘し global history の新たな定義を提案する論文や、日本の研究史をも取り込んだ上で「奴隷解放」の意義について新しい見方を提示する書籍など、日本の研究成果と英語圏の研究をつなぐ英文での重要な業績が含まれている。これからの3年の事業期間中に、これまでの研究集会で口頭発表され議論された報告に基づく新しい研究成果が、英語、日本語でさらに多く公表されてゆくことになるだろう。

また、東京拠点の研究者たちが集まって本共同研究の進め方を議論する会合や、外部の研究者を招いて本事業のテーマに密接に関わる主題についての国内での研究集会なども適宜開催し、メンバーの間での意見の交換と情報の共有を行っている(平成26年度4回(6月14・15日、10月25日 於)東京大学東洋文化研究所、1月11日 於)長崎大学、1月25日 於)国立民族博物館)、平成27年度1回(7月12日 於)法政大学)。

大学院学生を対象とするサマースクールは、各拠点の主要な研究者が、ほぼ1週間に亘って、様々なテーマや研究方法について、大学院学生を指導しながら互いに考えを述べ合うという点で、共同研究としての側面も強く持っており、この交流事業全体にとって極めて重要なイベントとして機能している。

○セミナー

	平成26年度	平成27年度
国内開催	0回	0回
海外開催	1回	1回
合計	1回	1回

【概要】

本事業では、4つの拠点の主要な研究者が一堂に会し、新しい世界史/グローバルヒストリー研究の方法論に関わる主題について意見交換を行う年1度の会合を「共同セミナー」と位置付けている。この会合は、4つの拠点の研究者たちが互いの関心を知り合い、視点、研究の前提や手法の相違に留意しながら、新しい世界史

/グローバルヒストリーの新しい方法論を編みだすために意見交換を行う場として、重要な機能を有している。

1年目はベルリンで「歴史研究者の立場性」をテーマに、2年目はパリで「新しい世界史/グローバルヒストリー研究におけるスケール」をテーマとして開催された。いずれも新しい世界史/グローバルヒストリー研究を進める上で避けて通れないテーマであり、参加者間で活発な討議がなされた。東京拠点からの参加者には、「西洋」の常識や視点を相対化する意見が期待されており、そのセミナーでの役割は重要である。ベルリン、パリともに5名が参加し、報告を行った。

○研究者交流

【概要】

いわゆるシニアの研究者と若手研究者や大学院学生などジュニアの研究者という2つのカテゴリーで交流を行っている。他の3拠点から本拠点を訪れるシニア研究者には、原則として、GHC (Global History Collaborative) セミナーでの研究報告か本拠点が主催する研究集会への参加を依頼している。その数は、平成26年度は、GHCセミナーが3回(4月25日、12月12日、2月20日 於) 東京大学東洋文化研究所)、平成27年度は、GHCセミナーが4回(5月25日、7月13日、7月21日、2月18日 於) 東京大学東洋文化研究所、研究集会が2回(9月2日 於) 東京大学東洋文化研究所、9月4日 於) 東京大学)である。同様に、前項の4拠点セミナー以外で本拠点から他の3拠点を訪問する研究者の場合も、テーマの定められた研究集会での報告、または、セミナー等での研究報告を行うことにしている。報告を行った人数は、平成26年度が4人、平成27年度は3人である。

一方、本拠点で受け入れた海外3拠点からのジュニア研究者の場合は、滞在期間が3ヶ月から1年と長いので、各自の関心に応じて授業などに出席させるとともに、まとめて研究報告を行ってもらう機会を設けている。本拠点が海外3拠点に派遣したジュニア研究者の場合も、3ヶ月から半年程度の滞在となるので、関心のある授業に出席し機会があれば報告を行うとともに、適宜ホスト研究者による指導を受けている。

(2)(1)の研究交流活動を通じて、申請時の計画がどの程度進展したか、「学術的側面」、「若手研究者の育成」、及び「研究教育拠点の構築」の観点から記入してください。

○学術的側面

国や言語ごとに微妙に異なる世界史の認識について、拠点間での相互理解が格段に深まった。特に、東京拠点の研究者たちは、日本の世界史認識の特徴と重要性を他の拠点の研究者たちに伝えるように努力している。その結果、新しい世界史やグローバルヒストリー関連の共同研究や講演に、東京拠点の研究者たちが招かれることが多くなってきている。また、「グローバルヒストリー」は歴史研究と認識の方法であり、これを用いて21世紀にふさわしい世界史の研究を進めることが重要だとの理解が、4拠点の主要な研究者の間で共有されるようになったことも、重要な成果である。

日本語圏について言えば、現在編集作業が進んでいる『グローバルヒストリーの可能性』論集(山川出版社から出版予定)と新しい世界史モノグラフシリーズ(東京大学出版会から出版予定)が出版されれば、既存の世界史認識の刷新が一気に進むものと考えられる。また、英語圏に向けては、4拠点が共同で新しい世界史/グローバルヒストリー研究の具体的なテーマについて研究集会を開催し、その成果を発表することが企画されている。

今後の課題として、1. さらに多くの具体的な研究成果を、講演、出版物やウェブデータの形で国内外に公表してゆくこと、2. いわゆる Global South に属する研究者や研究機関との協働を図り、先進諸国でのみ有効な世界史理解に陥らないように注意すること、の2点を挙げておきたい。

○若手研究者の育成

ポスドクや大学院学生などの若手研究者の育成には特に力を入れ、すでに一定の成果が出始めている。2年の間に、本拠点からベルリンに1人、パリに1人、プリンストンに2人の計4人の大学院学生を3～6か月派遣した。彼らは、各拠点の責任者のアドバイスをうけながら、各大学の授業への出席と研究報告、研究資料の収集などを精力的に行った。1年目にベルリンに滞在した学生は、2年目に再度現地を訪れ、最初の滞在中に自らが培った人脈を生かして、自らの研究テーマに関わる研究セミナーを企画し、成功裏に終わらせた。また、本拠点では、内外の若手研究者がともに切磋琢磨できる環境を整え、海外拠点からの若手研究者を数多く受け入れている。その数は、この2年でベルリンから4人、パリから2人、プリンストンから3人である。3拠点以外からも、若手研究者が多数訪問・滞在し、本拠点が国内外から受け入れているPDや大学院学生と混じり合って互いに刺激を与え合っている。

平成27年9月に本拠点が主催したサマースクールには、4つの拠点から合計21人の大学院学生が参加し、各自の博士論文の内容について互いに討議し、各拠点の研究者から懇切な指導を受けた。丸一週間に亘って寝食を共にした学生たちは、仲間意識を強く持つようになり、スクールの終了後もスカイプなどを使って自主的に彼らの間の国際ネットワークを維持・発展させ、共同でウェブ雑誌へ投稿する論文の執筆を試みている。

○研究教育拠点の構築

東京大学東洋文化研究所は、研究に特化した部局であり、新しい世界史/グローバルヒストリーに関する国内外の研究交流ネットワークの中心拠点として、すでに十分に機能している。一方、教育については、東洋文化研究所自体に所属する学生はいないので、この「欠点」を逆手に取り、サマースクール参加希望者や海外拠点派遣希望者を、学内だけではなく日本全国に公募し、他大学の学生にもチャンスを与えている。実際、第1回のサマースクール参加者として、名古屋大学の学生を一人選んだ。この意味では、教育面でも、日本全国に開かれた拠点として十分に機能していると考えている。

ただし、東京大学の内部に限れば、今後、学生の所属する人文社会系研究科、法学政治学研究科、総合文化研究科などの研究科と学生の教育に関してどれだけ緊密な協力体制を作ってゆくかが課題として残されている。

4. 事業の実施体制

本事業を実施する上での、「日本側拠点機関の実施体制」、「相手国拠点機関との協力体制」、及び「日本側拠点機関の事務支援体制」について記入してください。

○日本側拠点機関の実施体制（拠点機関としての役割・国内の協力機関との協力体制等）

日本側拠点機関である東京大学では、東洋文化研究所が中心となり、学内他部局に所属する研究者をネットワークでつなぐ形をとっている。年間計画や海外拠点に派遣する若手研究者、サマースクール参加者選考などの重要事項は、ネットワーク上に設けられた運営委員会で意見交換の末に決定される。また、国内他機関に所属する協力研究者とは、メイリングリストを使って頻繁に連絡を取り合い、情報の共有に努めている。さらに、東洋文化研究所のサーバーを使って、和文、英文で拠点独自のウェブサイトを開設し、本事業の基本的なデータに加えて、イベントのお知らせや研究成果の紹介、活動報告などの情報を随時アップしている。このウェブサイトリンクさせて、Facebook のアカウントも設け、情報の一般への周知に努めている。

海外からの研究者によるセミナー、国内研究者が参加する研究集会などは、主に、東洋文化研究所の会議室を使って開かれる。

東洋文化研究所は、海外からの研究者や大学院学生を受け入れる機関としても、十分に機能している。研究所内の共同研究室には、机と個人で使用できる本棚、ロッカーなど基本的な設備が備わり、彼らが自由に研究活動を展開できるように配慮されている。

○相手国拠点機関との協力体制（各国の役割分担・ネットワーク構築状況等）

4つの拠点は、基本的に対等な立場で、共同セミナー、サマースクールを企画し、その開催場所を提供している。この報告書を記している時点で、平成28年度のサマースクールはすでにプリンストンで開催され、共同セミナーは東京で開かれることが決まっている。また、ベルリンとプリンストンとの間では、二大学間での研究者、学生の相互交流が行われている。パリ拠点がこの秋から開始するグローバルヒストリーの共同研究には、東京を含む他の3拠点の研究者が参加している。ベルリンにグローバルヒストリーの博士課程が設置される平成29年春以後は、4拠点の間での教育研究交流は複数の手段によってさらに活性化することが予想される。

4つの拠点によるネットワークは、この2年間の活動で確立したので、今後は、各拠点が重点担当地域を決め、この国際ネットワークの拡充を目指して協力することになっている。東京拠点は、東アジア、東南アジアの関連研究者との交流強化を担当する。

○日本側拠点機関の事務支援体制（拠点機関全体としての事務運営・支援体制等）

東洋文化研究所の事務部研究支援担当者が、代表研究者と緊密な連絡を取りながら、拠点機関としての各種書類の作成や日本学術振興会との連絡業務を担当している。

他の海外3拠点や国内協力研究者との連絡、研究集会やセミナーの開催は、拠点代表の羽田と専任の学術支援職員が担当している。また、ウェブサイトの更新は学術支援職員が担当し、ウェブサイトの企画の一部やFacebookへの情報アップは、若手研究者にも協力してもらっている。